

蜀魂

上水敬由

今年の夏は、何とか汚い表現で申し訳ないのだが、くそつたれのような暑さだった。

その最中、そろそろこの暑さも下り坂になるのではないかなどと、はかない望みを抱き始めた頃、東京の知人から転居の便りがあつた。

経緯については、いつもどおり一切触れることなしに、港区赤坂に転居することになったという。

「ふむ、なるほど、そうか」

こちらの反応としては、まあそれくらいのものだ。

ただ、転居先が赤坂ということで、勝海舟のことを思い出した。赤坂といえば勝海舟の終焉の地なのだ。

そのついでに、以前読んだ半藤一利の『それからの海舟』と、そのときに覚えた若干の違和感を思い出した。

そこで、あらためて言うまでもないが暇だけは十分にあるので、それに飽かせて、再度目を通してみることにした。

とりあえず記憶をたどりながら、目についたものを並べていくことにしよう。

西国の片田舎で日を送っている身としては、のつけから始まる「江戸っ子」自慢はいただけないが、それはまあご愛敬として目をつぶろう。

いつだったか、ずいぶん前になるが、転勤してきた上司がやたらに東京風を吹かせていたのを思い出す。それを嫌う者もいたが、こちらは別に何とも思っていないかった。

あるとき彼が土産に持ってきた佃煮が、変な苦みもなくとてもうまかったので、店名を訊くと、もったいぶって教えようとしなない。なんだかけちくさい感じがした。

空襲から逃れ新潟へ疎開したことを「都落ち」と表現するような半藤の「江戸っ子」自慢には、実のところ自らを勝海舟と同列に並べたいとの思惑が隠れているのかもしれない、などと思う。

（わたくしが「官軍」とは金輪際いわないと頑張っている薩長を主力とする「西軍」を、勝つつあんはアツケにとられるほどあつさり」と「官軍」と書いている」という。

この不満はおかしいだろう。なぜならとくに機能不全に陥っている江戸幕府は朝廷に政権を返還すべきだと考えている勝海舟が「官軍」と呼ぶのは当然だし、半藤も勝海舟の考えをそう理解していたはずだから。

続けて、話を面白くするためか、「錦旗」の創作について、

いかにも大変な悪事のように言うが、もし勝海舟がそれを知ったとしても、それくらいのごく一部の人間を「謙虚」と持ちあしらわれるだろう。

このあたりの半藤の感覚がどうも腑に落ちない。あるいは編集者上りのなせる技か。

ついでに言えば、第二次世界大戦における日本の戦いを半藤はあっさり「太平洋戦争」と呼んでいるが、彼の言い分を借りるならここは「大東亜戦争」と呼ぶべきではないか。

勝海舟にいわせれば、おそらくどうでも良いようなことではあるが。

十代半ばで終戦を迎え、いわゆる「戦後民主主義」を謳歌したのであろう半藤が、近代日本史を振り返って、日本人が日露戦争以後（始末に悪い夜郎自大の民族になったことはたしかである）と言いつつ、それに比較して（幕末そして維新の人たちの何と謙虚であったことよ）と言う。

おいおいちよつと待てよと言いたい。

およそどんな時代にもいろんなヤツがいて、いろんなことをしでかすものだ。

日本人のすべてが一時に「夜郎自大」になったり「謙虚」になったりする訳がない。当たり前だ。

たとえ「日露戦争以後」でも、「謙虚」であったり他に善行を施したりした例は数多い。また「幕末そして維新」にも、とても「謙虚」とは言いかねる人物は登場する。

要するに、半藤は「日露戦争以後」の日本人をおおまかにひとくくりにして「夜郎自大」と批判し、比較の対象にならない「幕末そして維新」のごく一部の人間を「謙虚」と持ち上げているだけのことだ。

私の父は大正初年の生まれで、最初は志願兵として海軍に入り、退役後、知人の紹介により福岡で職を得ていたが、緊迫化する時勢によって再度軍務に着くことになった。終戦後は再び元の職場に復帰している。

妻の伯父にあたる人はおそらく昭和初年の生まれで、海軍の神風特別攻撃隊に志願し、鹿屋で訓練中に終戦を迎えた。

一時は役場に籍を置いたが、ほどのよいところで退職し、篤農家として生を終えた。

私は戦後のいわゆるベビーブーマーとして生まれ、当然戦争との直接的な関わりはなかったが、たまたま遭遇した七〇年安保では、騒動の内と外で思想家や政治家についてさまざまな観察をする機会を得た。つまり一般世間並の人間だということだ。

父は、戦争の話をすることはほとんどなかったが、あるとき「アメリカの戦車は日本の戦車より強かったのか」と尋ねられたことがある。

幼い頃、模型作りに励んだ私が「当たり前だ」と応えると、ただ「そうか」と言った。（海軍さん）の戦車に関する知識はそれくらいのものであったのだろう。

またあるとき、岡本喜八の『日本のいちばん長い日』をテレビ放映していた。その中で、大本営の中庭で将校たちが重要書類を焼却している場面があり、通りすがりにそれを見かけた父は、実に嫌そうな表情を浮かべた。そんな表情を見せることなどは滅多にないことだったので、今でもはっきりと覚えている。

『日本のいちばん長い日』の原作者は半藤だった。

世代論風というと、厳しい戦争の実際を体験した父と、綺麗に死ぬための訓練をした伯父と、疎開から戻り米軍占領下の自由を与えられた半藤と、それらをぼんやり眺めている私ということになる。

福沢諭吉の『瘦我慢の説』を取り上げるにあたって、箔付けの気持ちからか、小泉信三による勝海舟批判を引用している。

勝海舟が福沢諭吉に対して（きみはまた下宿屋みたいなことをやっているのかい）と言ったということを、（国家の根本を形成する教育を、下宿屋とは何たる言い方）だと、結構ムキになって述べたそう。

小泉信三の言い分もわからなくはないが、冷静に見てみると、私学教育のあり方とは入学金や授業料などのお金を学生から取って建物などの提供をしていることに他ならないので、（下宿屋みたいなこと）と言って間違いではない。

自らが属する大学と学問への愛情が現れている発言だとし

ても、「大学全入時代」を迎えた現在において、胸を張ってそう言い切れる大学がどれほどあるだろうか。彼の大学はともかくとして。

物事の本質を直接見抜いて言い表すのが得意な、というか、そういう癖のある勝海舟としては、別にけなすつもりがあつて言った訳ではないだろう。

半藤は『瘦我慢の説』を（その瘦我慢をとおすことで日本全土を西欧列強の代理戦争に投じてしまうことが正しかったか）と批判し、（華々しくて見栄えがするが、政治家としては決してそういうものではない）と断じる。

そのうえで、日露戦争の直前に公表された『瘦我慢の説』が「大評判」となって（思想的な柔弱を論難するときの基本的な物差しともなる）という。

なるほど、そうなのか。すると先の（始末に悪い夜郎自大の民族になった）原因のひとつがここにあるということか。

ところが、話がそういうふうにはつながらない。
なぜか（戦後日本においては、福沢諭吉が民主主義の開祖に祭り上げられ、瘦我慢のおおかたの評判はすこぶる芳しい）と続く。

ここから（話をさらに広げ）て、（現今の日本）が（これまでの価値体系はご破算となり、社会秩序は崩壊）して（外圧をまともに受けて、いまや国家意識・民族意識の統一高揚が唱えられている）状態にあるとする。半藤によれば、これ

が〈新しい『瘦我慢の説』〉だという。

福沢諭吉の『瘦我慢の説』に対する半藤の評価は、いわば「真つ当な」ものだと思うが、本来であれば、さらに一步を進めて、『瘦我慢の説』をふくむ福沢諭吉の言説が、時の言論人、一般人、軍人や政治家に与えた（敗戦にいたるまでの）影響を述べるべきだったのではないか。

ところが、そういった批判を行うことが〈民主主義の開祖〉としての福沢諭吉像を傷つけるとして、半藤自身が〈おおかた〉から非難される結果をもたらすかもしれない。

そんな恐れから〈新しい『瘦我慢の説』〉なるものを付け加えたようにみえる。

もちろん、そうではない可能性はある。

そのうちに機会を見つけて、赤坂を訪れてみよう。

時鳥不如帰遂に蜀魂

海舟

○『それからの海舟』半藤一利（ちくま文庫）他参照